

第12回 長野市活力ある学校づくり検討委員会 議事録（要旨）

【開催日時】

日 時 平成30年2月21日(水)10時00分～11時50分

場 所 長野市役所 第一庁舎 5階 庁議室

【出席者】

(委員)

山沢委員長、風間委員、小林委員、志川委員、高橋委員、田川委員、西脇委員、藤澤委員、松岡委員、丸山委員

(長野市)

近藤教育長、松本教育次長、熊谷教育次長、樋口教育次長副任兼総務課長、上石学校教育課長、倉島主幹兼小中高連携推進室長、新津主任指導主事、唐木主任指導主事、小川係長、近藤主査、中村指導主事、鳶田指導主事、千野指導主事、島田指導主事、山岸指導主事、田中指導主事、関指導主事、深澤指導主事、藤森指導主事

【会議次第】

- 1 開 会
- 2 あいさつ（教育長）
- 3 協議事項
 - (1) 審議のまとめ(素素案)について
 - (2) その他
- 4 その他
- 5 閉 会

【会議資料】

資料 審議のまとめ(素素案)

【発言要旨】

(委員長)

- 本日は審議のまとめ(素素案)について議論していただく。(審議のまとめとして)初めて文章になったが、文章に捉われることなく、今まで議論してきたことを踏まえ、中身をしっかりと議論していただきたい。

— 事務局 資料 審議のまとめ(素素案)について説明 —

(委員長)

- 本日の議論であるが、最初は全体を通したご意見をいただきたい。その後は各章ごとに意見をいただき、徐々に絞りながら議論していきたいと思う。最初に全体に関わる意見等があったらお願いしたい。
- まず私からお願いします。19ページの図が(このまとめで)一番言いたいところだと思うが、18ページまでの説明と19ページの図の関係について、何も書かれていないのでよく分からない。「以上の考えを図にまとめると」といった一文を記載すべきである。この図が一番大切である。この図が重要であ

ることを書く必要がある。

(事務局)

- 分かるような形で修正したい。

(委員)

- 前回に比べると流れが非常にスムーズになった印象を受ける。細かいことは後で指摘するが、大きな問題として、「多様性」という言葉が多く使われているが、「多様性」ということをもう少し丁寧に書いた方がいいと感じる。例えば、3ページ、上から10行目の「多様性」という表記。12ページ、1のタイトルにある「多様な」という表記。15ページ、ここが核心であり、多様性の中で子どもたちに何が育まれるのかということが書かれていると思うので、2のタイトルは「多様性の中で育つこと」ではなく「多様性の中で育つもの」とすべきである。(1)のタイトルについては、「好ましい」という表現が良いかは後で述べるが、「人間関係づくりをする力」、(2)のタイトルについては、「協働しながら問題解決をしていく力」、このような表記にした方が良いと感じた。更に、18ページ、2のタイトルにある「多様性ある集団」という表記。その文章中(上から6行目)の「多様性を育む」という表記。また、最後の段落(上から14行目)の「多様性ある集団」という表記は、集団に多様性があるのか、多様な他者なのか、そのあたりが混在しているイメージがある。また、最後の結論の部分、3のタイトルに「みんなが集まって笑顔があふれる学校を」とあるが、この「みんな」とは誰のことなのか。「2 多様性ある集団の中での学びを」における多様性は、教育の環境の中で様々な教員がいること、「3 みんなが集まって笑顔があふれる学校を」における多様性は、地域や社会の様々な大人や、様々な年代の人達が集まるというイメージに感じられた。最後に、18ページの最後の段落において、地域社会や事業所等について触れているので、附帯意見として記載されている通学区域や複合化の問題がこの中に入れられるような気がした。

(委員長)

- 「多様性」は、今ご指摘いただいたように、全部言い換えられる感じである。今回の文章で言いたいことは何となく分かるが、書く人間がきちんと(言葉の意味を)理解していないと誤解を招くことになる。それぞれの場面で表したい様々な概念を「多様性」という言葉でまとめて表記しているところに問題があると思われる。

(委員)

- いろいろまとめていただき感謝する。10ページ、「2 これまでの意見のまとめ」に視点1、2、3とある。また、17ページ、下から二つ目の段落であるが、小・中連携で対応していくのか、小中一貫教育で対応していくのか、義務教育学校にしてやっていくのか、3通りが考えられるが、市教育委員会としてはどのようなお考えなのか伺いたい。

(教育長)

- 今、一貫教育ということが誤解されていると思う。小中一貫した1年生から9年生という、これは義務教育学校ということになる。小中一貫教育を行う場所ということである。一貫性のある教育ということになると、小学校と中学校が連続・連携しているということである。「小・中連続性のある中で小学校1年生から中学校3年生までの教育」という形で言い換えていきたいというのが私の考え方である。一貫教育・義務教育学校にするということは個人的には考えていない。

(委員)

- 調べてみたところ、2016年度にスタートした全国の義務教育学校は22校ある。例えば、石川県珠洲市の大谷小学校、児童生徒37人の義務教育学校である。高知市の行川学園は45人の児童生徒で、特認校であり義務教育学校である。高知市の土佐山学舎は、98人の児童生徒で、同じく特認校であり義務教育学校である。土佐山学舎では50%の児童生徒が地区外から通学しているとのことである。長野市ではこのようなことは実施しないということが理解できた。

(教育長)

- 今後、どうしてもそのような学校が必要だとなってくれば（義務教育学校等について）検討することもあるかと思う。しかしながら、何分、義務教育学校は実績がまだ出ていないところがほとんどなので、信濃町でも義務教育学校を設置しているが、現在、様子を見ているところである。

(委員長)

- 2ページから8ページまでの教育環境について、前回のご指摘で修正した部分も多くある。ご意見をお願いしたい。2ページは長野市に関するデータ、続いて、社会の動向、グローバル化、高度情報化が進んでいる様子。3ページは地域のつながりや支え合いの希薄化について書かれている。以上はよろしいか。私は、今の子どもたちの65%は大学卒業後、今は存在しない職業に就くという予測があるが、本当なのかと思う面もある。

(委員)

- 「想像もつかない社会」とあるが、これが学校教育と関係があることを言っておかないといけないと思う。

(委員長)

- グローバル化というのは、外国人と一緒に住むといったことがあるのではないかと。人種の多様性ということだと思うが、どこから引用してきたという印象になる。

(教育長)

- 想像もつかない社会になるということは、文部科学省でも中央教育審議会でも言っている。どうやって想像するのと言われても、想像できるものではないので困ってしまうところがある。戦後の小学校と、今の小学校では全然違っているように、今の常識とは違う考え方でつながるのではないかと。20年位で変わるというのが私の感覚である。

(委員)

- 2ページ、グローバル化のところであるが、市はこれに耐える教育をしていくのかと捉えてしまう。

(教育長)

- 教育の内容や指導については「しなのきプラン」で示している。この答申では、どのような教育環境が望ましいかに視点をあてていただきたいと考えている。

(委員)

- 「1 社会の動向」の(1)、(2)、(3)のタイトルの語尾が全て「進行」になっているのが気になった。グローバル化、高度情報化は「進展」ではないか。(3)については希薄化で止めてもいいのではないかと。
- 「2 現在の小・中学校」の(1)に記載されている長野県が示す望ましい学校・学級規模は引用になると思うが、どこから引用したか明記した方がよいと思う。

(委員長)

- 4ページ、下の表も、上の文章との関連を記載すべきではないか。

(委員)

- 図表1「長野市の人口の推移と推計」のグラフは1990（平成2）年から掲載されている。1990（平成2）年は377,261人、2060年の推計は232,227人とのことであるが、この数字（各年の総人口）は記載せず、グラフで示すだけでよいのではないかと。

(委員長)

- これは市で算出したものなのか。

(事務局)

- 長野市人口ビジョンから引用している。

(委員長)

- こう見ると現実には厳しいと思う。6ページ後半から学校間連携、地域との連携、8ページに学校施設と運営経費についてあるが、これらについてはいかがか。

(委員)

- (教育の) 目標があって施設がある。グローバル化が進むにしろ、高度情報化が進むにしろ、社会を支える子どもたちをどう育てるかという目標があるから、それを可能にする教員の人数や質、カリキュラム、必要なグラウンドや教室、IT環境などが決まってくる。先に施設があるわけではないので、根本がしっかり議論されていけばいい。施設を目標に合わせていけばいいので、根本となる目標がしっかりしていればなんとかなるし、何とかしないとイケないと思う。

(委員長)

- ここから、9ページ、第2章に入る。これまでの審議の経過、これまでの意見のまとめ、視点は3つある。この点がポイントだと思うが、いかがか。

(委員)

- 視点については委員の意見なのでそのまま書いてあると思うが、視点1の「友達との遊びの中にも学びの勉強もあり」の「学びの勉強」という表記が気になる。また、「小学校中学年までは少人数になった場合、」という表記は、「少人数になった場合でも」のように、少人数になっても地域の見守りの中で育つことが大事という表現にした方がいいと思う。

(委員長)

- それでは、第3章、本題に入る。発達段階に応じた多様な教育環境に関する説明を受け、それを図式化したものが14ページの図になる。12ページに小学校低・中学年の記載があるが、この委員会の審議で肝になるところである。小学校低・中学年と高学年では違う場所で教育環境を整えることも可能であると結論で述べている。
- 高校生期で、自分を探す時期というのはいいが、最後の方に「長期間に渡り実社会で学ぶ機会」とある。これは本当に必要なのか。インターンシップだと思うが、大学生でもあまりやっていない。このあたりはどのような考え方になるのか。「長期間に」という表記は必要か。

(教育長)

- インターンシップについては難しく、どれくらいやればいいのか結論は出ていない。実社会にあまり関わらなかった高校教育を反省して、もう少し実社会のことも取り入れてやりましょうということだと思う。いわゆる高校のコミュニティ化。現在、県が学びの改革を行っている。ここまで強く言わずに「実社会で学ぶ機会などを通して」という表記でいいのではないかと考える。

(委員長)

- 高校生期については、連続した学びという長野市の方針で記載されているので、長野市内にある高校にやってほしいというのではないと理解する。

(委員)

- 長期間というのは、一年の中の長期休みでボランティアなどいろいろ経験すればいいと思う。単位として認めたらどうか、くらいのものではないか。例えば、アメリカでは、大学に行った時にボランティア等についてどんな経験があるかと聞かれる。それをイメージしたのではないかと考えたが、いかがか。

(教育長)

- その点が今後の学びの改革で、長野県の高校がやっていく中で、どのようになっていくのかということ

ころなので、ご指摘のとおり、ここまで書いてしまうと、足を踏み入れてしまうのではなかと感じてしまう。

(委員)

- ボランティアで高校生を受け入れ、活動に対して評価項目を決めて報告書を出してくれる。このようなことを受け入れ団体が行ってくればいいな、くらいの感じだと思う。

(教育長)

- おっしゃるとおりである。学校だけで生徒を縛った時代から少し離れましょうという意味合いにしておきたい。

(委員)

- 各発達段階に応じた教育環境が必要であるという点はよく分かる。19ページの図にもあるように、各発達段階を分割するのではなく、連携しながら、シームレスで教育環境を整えていくことが基本にあると思うので、13ページの最後の段落にそれぞれの発達段階を連携させるという文言があった方がいいと思う。

(教育長)

- 表現として無かったので記載するようにしたい。

(委員長)

- 15、16ページあたりはいかがか。

(委員)

- 15ページに、「かつて40年程前まで」とあるが、40年前は1978年だから続く記述はもう少し前のことのような気がする。「40年」という表記が気になる。

(委員長)

- 「かつて」くらいがいいのではないか。

(委員)

- 12ページ、小学校高学年期のところに「劣等感を持ちやすくなる」とあるが、劣等感だけではなく、優越感もあり、多様性の中で自己肯定感を育てたいということではないか。劣等感を抑えるだけではない、手をつないで1等賞という教育ではなく、1等もいれば6等もいる教育。芸術が得意な子もいれば、全部が得意でない子もいるが、それぞれの子どもが自己肯定感を持てるようなところへ行く。劣等感を持っているのが当たり前というところで、自己肯定感ということがどこかに出てくるといい。みんな平等だから1位もいないし6位もいないということではなく、いろいろな子がいるけど自己肯定感も持っているという形にしたいのではないか。

(教育長)

- 表現が難しく、一例として挙げたが、優越感も劣等感も生まれると並列の表記にした方がよいと思う。最後の「自主性、自律性、社会性が育まれる」といったところが自己肯定感につながる表現だと思う。

(委員長)

- 17ページ、第4章、「子どもたちの明日のために～新たな学びの場の創造～」がまとめの部分になる。17ページは「発達段階に応じた連続性のある学びの場」の必要性について、その学びの場のまとめについては18ページに記載がある。そして、それらを図で表したものが19ページの図となっている。
- 私から1点、19ページの図の右下、中学校の枠の中に「地域、家庭、事業所との連携を推進」とあり、その下の小学校の枠にも同様の記載があるが、これまでの文章の中に事業所という表記があったか。

(教育長)

- 教育振興基本計画に記載されているもので、それと整合性を合わせるために記載したものであるが、(事業所という表記は) 抜いたほうが良いか。

(委員長)

- 検討していただきたい。

(教育長)

- 学校を支えていただくには、家庭、地域という形だけではなく、今は、事業所、事業主さんにも支えていただかなければいけない。

(委員長)

- それならば前の文章のどこかにその旨記載し、次回、提案していただきたい。

(教育長)

- 18 ページ、「3 みんなが集まって笑顔あふれる学校を」の最後の段落あたりに記載できないか検討したい。先ほどご意見をいただいた附帯意見との関連で、ここをどの程度の記載にするか検討したい。
- 先ほど委員長からご指摘のあった 19 ページについては、「多様性ある集団の中での学びを」の部分これから子どもたちにとって一番大事にしなければいけないと考える一方、それと相反する「できる限り地域に学校を残したい」という意見をどうするのか、そのような視点で考えた案になっている。

(委員)

- 17 ページ、小学校低・中学年期と高学年期には具体的な例が記載されているのに対し、中学生期になると具体例が記載されていない。高校との連携等をうたっているのに、その具体的な方策等を記載しないと、中学生期はこのままでいいのかとなってしまう。

(教育長)

- 中学生期は様々な経験を大事にしながら今の教育内容を更に充実させていく。表現は検討したい。

(委員長)

- 18 ページ、「2 多様性ある集団の中での学びを」の 3 つ目の段落の中に「子どもたちに多様性ある集団」とある。「2 多様性ある集団の中での学びを」において教職員について述べた後、「3 みんなが集まって笑顔があふれる学校を」へとつながっているが、先ほどの説明では、(10 ページの) 視点 1、2 に基づいて考えると「3 みんなが集まって笑顔があふれる学校を」としてまとまるということであった。この点をもう一度説明していただきたい。「2 多様性ある集団の中での学びを」では、学級数が減ると教職員数が減るといっているのか。

(事務局)

- 文言が足りないのかもしれない。視点 1 にある、小学校高学年と中学校の連携が大切であること、少人数になった場合でもそうでない場合でも、地域の見守りの中で育つことが大切であること、小学校低・中学年の通学距離への配慮が必要であること、また、視点 2 にある、協働学習や共同作業などが大事であること、そういったことを表現する言葉、連携を意識する言葉が足りないと感じている。

(委員長)

- 20 ページ、附帯意見について、最初にある教員の意識改革のところ、「本気になって」という表記は適切ではないと思う。

(教育長)

- 佐々木先生のご講演でお聞きした内容であるが、表記は修正したい。
- 先週、長野市の中学生サミットにおいて生徒会の子どもたちが情報交換を行った。文化祭や生徒会役員等をどうするかについて話題となり、最後はいじめ問題が話題となった。子どもたちは少子化につ

いてかなり意識しており、役員になる生徒がいなくなっている、どうやって学校を運営するのかなど、様々に考えていることが分かった。子どもたちは部活に関してもかなり切実感を持っている。蛇足になるが、先日の市長との総合教育会議の中で部活の問題が話題となった。部活が課外活動でなく、教育課程内に位置付けられたため、どこの学校でもやらなくてはいけなくなってしまった。今までの部活動を全国的に見直さなければいけないのだろうという話をさせていただいている。部活動は、私の子どもの頃はクラブだった。東京オリンピック以降、いかに優秀なスポーツ選手を育てるかということで、学校対抗、子どもが沢山いた時代に競争させて活発になったのだが、今は子どもが少なくなり行き詰まりつつあるので、見直しについて教育界や学校現場で考えていかななくてはならない。ここには載せてないが、選択の自由がなくなってきていると子どもたちは訴えている。

(委員長)

- 関係資料についてはいかがか。

(委員)

- 現行制度では、法令により部活動は課内活動であるが、ずっとこれできているわけではなく、現状を見て、様々な社会事情、児童生徒の数やいろいろなものを見ながら、制度は変わってきている。そういうところはいいのではないかと思う。例えば、プールにしても、効率性、専門性、危険性等を考えると、教員数が少ないのに水泳の専門的な指導までできないなど、いよいよ専門的な部分はクラブチームに任せるという方向へ行かざるを得ないということは、そういう社会情勢になったことを考えて、法令だから、仕方がないからそのとおりやっていくのではなく、一步踏み出して、教員、生徒、様々な公共施設の現状がそうだから、今までの区切りからもっと自由度を持てるように一步踏み出すというところが出てくるといいと思う。

(委員)

- 今の話に関わって、県の中体連、国の日本中体連は部員数減、生徒数減など10年後を見越した部活動のあり方ということで検討に入っている。合同チーム、地域総合型スポーツクラブ、拠点化方式等で活動している生徒の大会参加等の検討を始めたことについて、昨日校長会で話をしたところである。

(委員)

- 私は地域の立場で出席しているので、地域の役割の大切さとつながりの大切さは十分理解している。住民として教育問題にどう関わるのか。子どもを見守るという立場で役割はある。また、学校から要請があった場合にはボランティアとして学校に入るが、これだけではいけないという提案だと思う。学校教育の問題、子育ての問題、これらには地域の関わりが大切だという視点が徐々に見え始めていくと思う。一つは、10年、20年後、子どもたちに自分達がお世話になるという発想で教育の問題を捉えていく。もう一つは、地域の役割は学校教育との連携ではなく、一体化することが必要だと書かれていると思うので、今回の案については大事に受け止めたい。私達の提案と現状分析を各地域の住民自治協議会がどう受けとめるか、しっかりした受け止めがないと、どうしても学校は厳しい立場になってしまうと感じた。貴重な提案だと思う。住民自治協議会の中で子どもたちの教育を行う部署は、名前はそれぞれ違うが、健全育成とか、幅広くとか、見守りとかいうことで終わってしまっているが、それをやっていくために、私達の意識が教育に寄り添う認識にならないといけない。学校はだめだ、子どもはだめだと言っている部分があるので、学校教育と連携して子どもを育てることに早く動きださないと間に合わないという危機感がある。文化教育ということで公民館に任せればいい、PTAに任せればいいということではもうだめなことが分かってきた。住民自治協議会の今後の発想として、地域の教育、子どもたちと学校をどうするかという点を大きな柱にすると訴えている。この提案を大事にしたいと考えている。

(委員)

- 学校の先生も労働の強化になると困ると思うが、地域が盛り上がってきているようなので(頑張ってもらいたい)。学校、地域、教育委員会をつなぐコーディネーターの方がいらっしゃるが、コーディネーターがいる地域もあれば、いない地域もたくさんあるので、具体的にどうつないでいるのか伺いたい。

(教育長)

- 今までは連携推進ディレクターという形で特定の学校では実施していたが、来年度からは、人数は増えないが、全部の中学校区で実施していただくよう計画している。(連携推進ディレクターを) お願いする方々は大変な思いをすることと思われるので、なるべく黒子に徹していただくという形でおいでいただきたいと思っている。この提案が契機となり、地区の人々、保護者の方々、そしてみなさんが教育をどう捉えていったらよいかということが広がっていくと今のことが出てくると思う。これでこうしますよというよりも、子どもたちの教育をこのように考えていきたいということで、みなさんから答申をいただければありがたいと考えている。

(委員長)

- 本日の議論はここまでとしたい。

以上